原村玄甫能医君継其業壮而移于大垣号当壮庵医術大行名聞遠近戸田侯歳以米給之娶士屋氏　生男五人曰春竹曰春倫曰道仙曰春達曰春泰道仙先卒孫男三人寛保元年辛酉八月二十六日以寿終年八十三歳葬于室原村故田之間　　孝子春竹謹識

これにより、北尾春圃は一六五九年十二月五日に生まれ、一七四一年八月二十六日に死亡したことがわかる。後藤艮山（やはり一六五九年生まれ）、香月牛山、岡本一抱などと同世代に属する。

なお、春圃の次男春倫の墓碑もこの墓域にあるが、彼は京都で没し、建仁寺に葬られたことがわかっている。藪内家第五代竹心紹智の四天王として知られた人である。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所）

『回生録』

―近世末期のある医師の診療録―

末田　尚

はじめに

広島県山県郡は、西中国山地の典型的な過疎地で、高齢者率二〇％を越える地域である。郡医師会は「高齢過疎地の地域医療」という今日的問題より出発して、「医療の在り方」「医とは何か」について検討する中で「山県郡医師会史」の編纂を六十一年四月決議し、六月小委員会を発足させ、八月調査に入った。

当郡の医人研究は、呉秀三、富士川游先生等によって始められ、郷土史家名田富太郎先生も郷土史の一環としてされている。更に昭和三十年より町村合併を契機として、新修広島県史、各町村史の編纂がなされ、一部の町村は現在調査編纂中である。しかし医学医療に関しては、断片的なもの又は偉人顕彰の記述のみで、医学医療の流れについて

は皆無に等しい。そこで我等は未調査の蔵の奥のひつぎの底に眠っている資料を探り、可能な限りの全医人調査をすることとした。この調査により、予期に反して新しい史料が発見された。『回生録』もその一つである。

一　『回生録』

㈠成立年代　文化十二年乙亥（一八一五）より明治七年九月まで。

㈡所在場所　広島県山県郡大朝町、保生堂医院、進藤岱三氏所蔵。

㈢記述者　初代　進藤周岱、文化十二年より文政六年。

二代　進藤周文、文政六年より天保十四年。

三代　進藤周元、天保十四年より明治七年。

進藤子陽、幼名豊吉、通称周岱、号は金谷、齢春。宝暦六年十一月一日に大朝村に生まれ、父は同村庄屋七右衛門、母は同村鉄師大門屋香川助右衛門四女銀、十二歳の春、医を志して山県郡有田村小田北溟（恰仙）のもとで儒医学を学ぶこと七年、安永六年丁酉（一七七七）周岱と改名、回生堂を開く。友人、劉元高は同村の医、後に芸藩家老上田学問所教授。小田玄蛙は師北溟の次男の医にして、後の芸州芭門の多賀庵主第三世……等あり。このような文人達との交友により詩文にも長じ著作もあったが、文化十一年二月の大朝村の大火により、三十年来の日記、著述殆んど烏有となる。従って現在の『回生録』も文化十二年以降のものである。又『陋室日記』と題す日記と共に、没年文政六年六月四日の数日前まで記録している。

㈣内　容

①　目次　患者一覧表あり。

②　本文　㈠　患者住所屋号名前並続柄。文化十二年には、患者教二九九人、延診療人数二、三三四人、投薬剤数一一、六九七剤であり、診療範囲も現大朝町の他、芸北町、豊平町、加計町の郡内の他、高田郡、島根県邑智郡に及んでいる。

㈡　病名又は症候

㈠　投薬名並その貼数、丸数

(ロ)、(ハ)については、我等東洋医学に知識乏しく、広島漢方研究会長小川新先生他会員の方々に内容検討を依頼研究中である。

③痘瘡は病名により明らかであるので、疫学的検討をした。

●幼児男十二人、女六人、計十八人。大人男二人、女一人、計三人。正月の患者は「痘后」と記し、又「痘后余毒」とし、繰越正月五人、二月二人、三月六月各一人、計九人。

●発生した時は「痘序」と記したもので十二人である。文化十一年末と、文化十二年末に流行している。

●診療日数、十日以内九人、一ヵ月以内八人、一ヵ月以上四人。

転帰が不明であるため、罹病期間は明らかでない。診療日数の少ないのは経済的要因等も考えられる。

おわりに

我等は郡医師会史編纂のための調査中、未発表の『回生録』を発見した。文化十二年より六十年に亘る三代の中、二代までは極めて正確に日々の診療が記載されている。その全貌については未解明であるが、文化十二年の内、我等に分析可能なものは検討し、本資料の存在を紹介するものである。

(広島県山県郡医師会史編纂委員会)